
平成ライダー × 逃走中

秋月真氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成ライダー×逃走中

【Nコード】

N5754K

【作者名】

秋月真氷

【あらすじ】

皆様はご存知だろうか。「逃走中」と呼ばれるゲームを。今回の舞台は風の街、風都に出来た新たなアミューズメントパーク、「風都ドリームアイランド」。参加者は…仮面ライダー！？

フジテレビ系列の「逃走中」を元に、テレビ朝日系列「仮面ライダー」の皆さんが参加したらどうなるかという妄想から生まれたこのお祭り作品。理由は単純、「逃走中」のナレーションがディケイドライダーの声（マーク大喜多氏）だったから！

誰が最後まで残るのか、どんな駆け引きがあるのか…それは僕にも

わかりません（駄目じゃん）！
十九人の参加者が織り成す逃走劇に、皆様のお時間を頂けましたら
幸いです。

オープニング（前書き）

皆様こんにちは。秋月と申します。

さて、この作品はフジテレビ系列の特別番組「逃走中」を、テレビ朝日系列「仮面ライダー」の登場人物がやったらどうなるのだろうか、という妄想から発展した作品でございます。

故に、この作品は「お祭り騒ぎ」な作品です。

ですので、ライダーの皆様には、ちょっとした矛盾が生じるかもしれません。特に龍騎。

そしてキャラ崩壊の可能性が現在否定しきれません。

それでは、それを踏まえた上で。

当作品にお付き合い頂けましたら幸いです。

オープニング

風の街、風都。その街の一画に、「鳴海探偵事務所」と言う名の探偵事務所が存在する。

そして、そこに舞い込んだ一通の手紙。それが、今回のゲームの始まりを告げていた…

「何だ、こりゃ？」

送られてきたその封筒を開けた瞬間、この事務所の所員の一人…左翔太郎は不審そうに眉を顰めた。外見は、小説などに出てくるような「ハードボイルド」を気取ったスーツと帽子姿だが、実際の所は非情に徹しきれないハーフボイルドな青年である。

さて、そんな彼に届いた封筒の中身は、最近出来上がった風都ドリームアイランドと呼ばれる遊園地の地図と携帯電話、そして手紙と…「S」と書かれた、紺色のUSBメモリに似た物体…ガイアメモリだった。

「翔太郎、それは…」

「ああ。スカルのメモリだ」

横で見ていた翔太郎の相棒…フィリップもまた、翔太郎同様に眉をひそめてそのメモリ…スカルメモリを見やった。

スカルメモリ。翔太郎の師である「おやっさん」こと鳴海壮吉が使用していたガイアメモリだ。

だが、それは「ある事件」をきっかけに鳴海壮吉と共に消えたはず。それなのに、何故…？

不審に思いながらも、翔太郎は同封されていた手紙に目を落とす。そこには、こう書かれていた。

―仮面ライダーの皆様方へ

この度皆様は当ゲームへの参加資格を得る事が出来ました。賞金は最高九十六万円。参加される意思がある方は、明日の午前五時に同封いたしましたツールと携帯電話を持って、風都ドリームアイランドまでお越し下さい

STAFF 一同―

随分と上から目線な文章だ、と思う。

ゲームと言うが、一体どんなゲームだと言うのか。そもそも、「仮面ライダーの皆様方」とは一体…？

「きゅ…きゅうじゅうろくまんえん!？」

「うおわっ! 亜樹子、お前いきなり耳元で叫ぶな!」

後ろから覗きこんでいたらしい、自称、この探偵事務所所長の鳴海亜樹子が、素っ頓狂な声で叫ぶ。彼女は鳴海壮吉の実の娘であり、この土地の権利者でもある。

ちなみに、現在この探偵事務所は裕福とはいえない状況にある。決して火の車と言う訳でもないが、お金はあるに越した事は無い。それでなくとも最近、フィリップが新しいツールを作る為の材料費として、

随分を金が飛んでしまっているのだ。金銭的余裕があるとはいえない。

そう思ったのか、亜樹子はがっしりと翔太郎の手を掴むと、その瞳をキラキラと輝かせて…

「翔太郎君。所長命令。絶対に参加して」

「はあ? こんなあからさまに怪しい手紙に書かれたゲームに参加しろってのか!？」

「良いから！参加しなさい！」

緑色の下地に、金文字で「言うこと聞かんかい！！」と書かれたスリッパで翔太郎を叩き…何だかんだで結局の所、翔太郎はこの怪しげな「ゲーム」に参加する事となったのである。

「逃走中」と言う名の、不可思議なゲームに…。

「ここは…何の世界だ？」

写真館のホールで、不審そうに呟いた青年は、門矢士と言う。

首からはマゼンダ色のトイカメラをぶら下げ、どことなく気だるそうな印象を受ける。様々な世界を巡る旅人…の様なものである。

その旅の同行者が、彼の後ろに立つちよつと低めの背の青年、小野寺ユウスケと、この写真館の住人である光夏海、そして主であり夏海の祖父である光栄次郎。

その栄次郎が、二通の封筒を士とユウスケに手渡した。

「俺宛？」

「どう言うことだ？」

「でも、来てたよ。士君とユウスケ君宛に」

自分が本来住むべき場所とは異なる世界だと言うのに、手紙が届くなどおかしいのだが…

とにかく、二人は渡された封筒を開け、中身を見やる。

そこに入っていたのは、二人ともほぼ同じ物。

手紙と携帯電話、「風都ドリームアイランド」と書かれた遊園地らしき場所の地図。ただ…土の方はそこに、彼がライダーとして戦う際に使用するライダーカード…「KAMEN RIDER DIE

ND」と書かれた水色のライダーのカードが同封されているが、ユウスケの方は一発の弾丸が入っていた。

「何だ、これ？」

「物騒ですね…」

不思議そうに顔を顰めるユウスケと夏海に対して、士の方は言うとうと…

「成程な、大体わかった」

パサリと手紙を読み終えて、そう静かに呟いた。

「分かったって…何が？」

「要するに…俺達は何者かに招待されたい。…ゲームに参加する、仮面ライダーとしてな」

「ゲーム…ですか？」

「ああ。賞金は最高九十六万円。ルールは二枚目に書いてある」

トントンとルールの書かれた紙を指し示しながら、士は面白くなさそうな声で夏海の声に答える。

そこに書かれていたのは、ゲームに参加しませんか、と言うような文面と、ゲームの詳細なルールが書かれていた。

「最高」という表現が気になったが、ルールの書かれた方を読み進めて行くうちにその理由はあっさりと分かった。

…このゲームは、秒単位で賞金金額が上がるらしい。それも、ごく単純なゲームで。

「この書き方だと、俺達以外のライダーも呼ばれてるんだろうな」

一枚目に書かれた文面：「仮面ライダーの皆様方へ」の部分に目を落とし、ユウスケはどこか懐かしそうな声を上げた。

自分がかつて出会った、異なる世界の仮面ライダー達。彼らと、また出会えるかもしれないと思ったから。

「…二人とも」

「何だ、ナツミカン？」

「ぜひ、参加して下さい。そして賞金を家に納めて下さい」

「え…？」

「家賃を納めていないのに、これ以上下宿させる訳にはいきませんから」

そう。ユウスケと士の立場は、この光写真館の居候と言う事になるのだが…この写真館に収入を入れることもなく、いつまでも居座っているのである。

士にいたっては彼が撮った写真の現像代やフィルム代を踏み倒している始末。

ここで回収しなければ、いつまでたっても回収できない様な気がした。

そしてやはり彼ら二人も…この正体不明なゲームに、参加することになったのである。

そして…某月某日、午前五時。

十九人の参加者が、ここ…風都ドリームアイランドに集結したのである。

それぞれの理由で、賞金を獲得するために。

参加者一覧 & a m p . 基本ルール（前書き）

本編ではございません。

今回の内容は「手紙の二枚目」だと思って下さい。

ちなみにルールは仮面ライダー仕様となっております。

参加者一覧& a m p・基本ルール

参加者

左翔太郎

門矢士

紅渡

野上良太郎

天道総司

ヒビキ

剣崎一真

乾巧

城戸真司

津上翔一

五代雄介

小野寺ユウスケ

ワタル

辰巳シンジ

剣立カズマ

尾上タクミ

芦河シヨウイチ

ソウジ

アスム

合計：十九人

「逃走中」ルール

1：賞金は毎秒二百円。ゲーム時間は八十分

2：参加者は、制限時間内、ハンターに捕まった時点で、それまでの賞金を失い、ゲーム失格となる

3：参加者は、指定されたエリアの外に出た時点で失格となる

4：仮面ライダーに変身できるのは、一回かつ十分間のみ。その他への変身は失格となるが、イメージの憑依は可

5：ハンターへの攻撃は、その時点で失格とする

6：制限時間内であれば、「自首」をしてその時点までの賞金を獲得することができる。ただしそれ以降のゲームには参加できない

自首に関する補足：今回は、エリア内を巡回するリボルギャリー、キャッスルドラン、デンライナーのいずれかに乗り込めば自首成立。ただし乗り込むためには最初に配布された特殊ツールと引き換えでなければならない。

特殊ツール：あらかじめ参加者に配布されたツール。戦闘には使用できないが、自首の際に必要な。それぞれには、下記のツールが配布されている

五代雄介、小野寺ユウスケ（仮面ライダークウガ）：神経断裂弾（一発）

津上翔一、芦河ショウイチ（仮面ライダーアギト）：G3-X制御チップ

城戸真司、辰巳シンジ（仮面ライダー龍騎）：SURVIVE―無限―

乾巧、尾上タクミ（仮面ライダーファイズ）：オーガフォン

剣崎一真、剣立カズマ（仮面ライダーブレイド）：CHANGE
CERBERUS

ヒビキ、アスム（仮面ライダー響鬼）：変身音叉 音角（黒）

天道総司、ソウジ（仮面ライダーカブト）：カブティックゼクタ
ー（コーカサス仕様）

野上良太郎（仮面ライダー電王）：マスターパス

紅渡、ワタル（仮面ライダーキバ）：フエッスル（金）

門矢士（仮面ライダーディケイド）：KAMEN RIDE D

END

左翔太郎（仮面ライダーダブル）：スカルメモリ

さて、一見単純に見えてそうでもないこの「鬼ごっこ」に似たゲ
ーム…

どのような展開が彼らを待ち受けているのか、それはまだ、誰も
知らない…

参加者一覧& a m p・基本ルール（後書き）

こんにちは。

秋月真氷と申します。

お久し振りの方も、始めましての方も、まずはご一読下さいまして誠にありがとうございます。

*

妄想が膨らむととまらなくなる厄介な性質のせいか、今回のようなことになりました。

確か前回もそんな感じでスタートしたような…

進歩なしですね。

*

さて、そんな感じではございますが、ゲームスタートまではもう少しお待ち下さい。誰がハンターを解放してしまうかは…おそらくは予想の範疇かと思われませんが。

*

果てさて、相変わらず妙なことをしでかす僕ですが、今後も当作品にお付き合い頂けましたら幸いです。

それでは、今日はこの辺で。

*

2010年3月29日

特殊ツール一覧を追加。

自首や「逃走中」ではお決まりの「あれ」に必要なってくるツールでございます。

ゲーム開始 ― 野上良太郎、左翔太郎―

「凄い人…」

集まった面々を見やりながら、野上良太郎は呆けたような声を上げた。

彼が賞金を獲得しようと思った理由はたった一つ。

少しでも姉に楽をさせてやりたいと思ったからだった。

何しろ彼は人より少しだけ不幸な体質であり、ちよくちよく事件に巻き込まれては検査入院だとかで出費がかさむのだ。姉は特に気にしていないようだが、それでも多少は心が痛む。当面の目的としては、七十五万円…六十五分ほど逃げ回れば、目標に達する。

それだけの時間逃げ切れる自信も体力も無いのだが、彼の仲間…モモタロスをはじめとするイマジン達が、物凄くやる気なので、それに託すことにした。

…彼らに任せて、良い結果に転んだことは、あまり…と言うか殆ど無いのだが。

「それに、あんな小さな子供までいる」

どう見ても小学生くらいにしか見えない二人の少年に視線を向け、良太郎は深い溜息を一つ吐いた。

あんな子供が、大金を必要とする理由が分らないが…きっと何か事情があるのだろう。それに、自分にやって来た「招待状」を考えれば、きっと彼らも、電王やゼロノス、キバと同じ仮面ライダーなのだろう。それなりに体力がある…と信じたい。

自分と言う例があるので何とも言えないが。

苦笑気味に思いながら、今度は手元にある地図を見やった。

ここは、「風都ドリームアイランド」と言うテーマパークらしい。

土地全体が、斜めに傾いた風車のような形をしており、自分達がい
るのは真ん中の円部分…中央エリア。中央に噴水、その周囲を花で
はなく色とりどりの風車が囲んでいる、憩いの広場と言ったところ
か。

今はシャッターが下りているが、昼間はこの辺りが飲食街になる
のだろう。

南の羽根に当たる部分はシーサイドエリア。ジェットコースター
やメリーゴーランドなどのアトラクションが豊富にある、子供向け
のエリアらしい。隠れる場所は少なそうだが、アトラクションによ
る障害物が多いため、逃げやすそうでもある。

北の羽根に当たる部分は大風車エリア。この街で一番大きな風車
が立っている。ちなみにマップによると、その風車は観覧車も兼ね
ているらしく、乗れば風都を一望できるらしい。

次に東の羽根に当たる部分はミュージアムエリア。ここには風都
の歴史や発掘された歴史的にも価値の高い物を飾った、小型の博物
館があるらしい。何でも、「風都博物館」の別館なのだそう。他
にも植物園や美術館など、およそ学術系の建物が並んでいるのがこ
のエリアである。

西の羽根はショッピングエリア。この街では有名なブランド「W
IND SCALE」の専門店や、スイーツの店、果てはオーディ
ション番組からデビューした新人のCDをいち早く発売する店まで、
様々な店が軒を連ねているらしい。ちなみに最近の流行は、「仮面
ライダー」を模した左右色違いのTシャツだとか。

そして…最後に南の羽根と東の羽根の丁度中間、風車の棒に当た
る部分は特設ステージ。ここはその名の通り、ラジオの公開録音や
テレビの公開録画、果ては子供向けのショーをやるために用いられ
る、「何でもステージ」がある場所。ちなみにパレードの始点であ
ることも、この場所の目玉らしい。

こうやって見ると、割と広そうな印象を受けるが…同時に随分と
隠れる場所も少ないように思うが…

「皆さぁん。よく来てくれましたね。お姉さん、凄く嬉しいです」

良太郎がどこへ逃げようかと考えようとした時、唐突に青い蝶が舞い踊り、子供向け番組のお姉さんを髣髴とさせる口調の女が現れた。

顔には笑顔が張り付いているが、どう見ても作り笑いにしか見えない。本当の感情を読ませない、と言う点では、青いイマジン…ウラタロスを連想させた。

「お前…何でここに!？」

「はい、お姉さん、今日はここのスタッフなの。要は、アルバイトです」

参加者の一人が噛み付かんばかりに怒鳴るが、女はそれを軽くあしらうと、ずいとい箱を差し出した。

「何だよ？」

「皆さん、くじを引いて下さい。逃げる順番を決めちゃいます」

にこにこ笑顔で言う彼女の説明は、こうだ。

これから逃げる順番をくじで決める。しかし、逃げる前に「ハンター」と呼ばれる、このゲームの「鬼」を解放するロシアンルールットを行わなければならないらしい。

逃げる順番にハンターBOXと呼ばれる箱につながった鎖を引き、「はずれ」を引いたらスタート地点から離れた場所へ移動出来るが、「当たり」を引いたらハンターは開放、その時点からゲームスタートである。

つまり…このくじの順番が遅ければ遅いほど、ハンターを解放する確率が高くなり、同時にいきなり失格になる可能性もあるのだ。

「…一番だ……」

「良太郎にしては、運が良い方じゃない？さっさと逃げられるんだからさ」

「そうだいいけど…」

自分を通して見ているのだろう、頭の中でウラタロスの声が響きに響く。

ちなみに、良太郎が引いたのは「1」と書かれたボール。自分の隣では、「19」と書かれたボールを握った、スーツに帽子の青年が、嫌そうな顔でそれを眺めていた。腰に赤いベルトを巻きつけているところを見ると、いつでも変身できるように、と言うことなのだろう。

確かに、賢いやり方かも知れない。

「よりによって十九番目か。こいつはいきなりハードボイルドだぜ」

クールに見せかけているが、声の中にはあからさまに残念そうな色が浮かんでいる。

一番と言うのも緊張するが、十九番と言うのもなかなか緊張する数字だ。何しろ確実にハンターが解放されるシーンを目の当たりにする数字なのだから。

「それじゃあ皆さん、スタートエリアに入って下さいね」

集められ、スタートエリア向かう。一番を引いているので、良太郎は真っ直ぐに鎖の前に立ったが。

とにかく、一本抜いたら何が何でも全速力で逃げよう。

堅く心に誓い、彼は目の前にある色とりどりの鎖を見やる。

―おい良太郎、勿論、赤を引くよな？―

楽しそうなモモタロスの声が頭の中に響く。どうやらイマジンの
皆は、このゲームのスタートを心待ちにしているらしい。

―何言ってるのさ先輩、赤なんて危険色じゃない。ここは、青…っ
て言うか、水色がお勧めだよ―

―男やったら、ドーンと派手に金色や！―

―えーつまらないよそんなの。やっぱり紫だよ。答えは聞かない
けど―

…決めるのは、自分なのになあ。

赤だ、水色だ、金色、紫と言い合う彼らの声を聞きながら、良太
郎は我知らず苦笑を浮かべた。

このままでは誰かが勝手に憑依して、これまた勝手に鎖を引きか
ねない。

そう思った良太郎が選んだ色は…

「それじゃあ僕…黒を引きます」

―何いつ！？―

「おーい少年、何でまた黒なんだ？」

今回の参加者の中では最年長らしい青年に問われ、良太郎は軽く
笑みを浮かべると…

「だって、デンライナーのパスの色だから」

―…センスねえな…―

―先輩、今更だよ―

―あかん、良太郎のセンスの無さはきつと一生なおらへん―

―モモタロスの馬鹿と同じ？―

何だか言いたい放題言われているが、とにかく決めた物は決めたのだ。鎖の先には四人の黒いスーツに黒いサングラスの男性…ハンターが、各個檻のような箱の中で、無表情に入っている。

当たり前なら、即ゲーム開始。ハンターは放出され、全員を追い始める。

思い切って良太郎はその「黒」の鎖を引き抜き…

……ガタン……

「…へ？」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。一目散に逃げようという決意すらも、忘れる程に。

だが、すぐに自分が引いた鎖が「当たり前」だったのだと気付くと、良太郎は脱兎の如くその場から逃げ出した。

解き放たれたハンター達は、間違いなくその視界に良太郎を捕らえているはずだ。何しろ、一番近い場所にいるのは彼なのだから。

「わわわわわ…っ」

とにかく、ハンターの視界から消えることが一番大事だ。自分の足の速さでは逃げ切るのはほぼ不可能だろうが、どこか物陰に隠れてやり過ごす位のことは出来るはず。

そう思い、彼はとにかく角を曲がりに曲がってハンターをまこうと努力する。それでも…ハンターは執拗に良太郎を追い、距離を縮めんと無表情に追いかけてくる。

—なんちゅう速さや、あいつら…—

—うわー、不気味—

驚いたようなキンタロスの声に引き続き、リュウタロスの嫌そうな声も頭に響く。確かに、物凄く早い。恐怖すら感じる程に。

そしていつの間にか、逃げ逃げてエリアの西側…シヨッピングエリアの一面に差し掛かったその瞬間。物陰にいた何者かにぐいと路地裏に引き込まれてしまう。

捕まった…！？

思い、びくりとその身を硬くするが…どうやら違うらしい。口元を押さえつけている相手を見ると、そこには十九番を引いていた帽子の青年が立っていた。

「静かにしてろ。要はあいつらの視界から外れりゃ良いんだろ。この場所なら見つかる心配は少ない」

低く囁かれ、良太郎はこくこくと頷いた。

どうやらこの青年は、自分を助けてくれたらしい。

しばらくして、ハンターの気配が消えたのを見計らい…良太郎はぺこりと頭を下げた。

「助けてくれて、ありがとうございます。えっと…」

「俺は左翔太郎。この街の探偵さ」

「ありがとうございます、左さん。僕は、野上良太郎です」

左翔太郎と言う探偵に一つ礼を言い、良太郎はぺこりと頭を下げる。

名前が「良太郎」と「翔太郎」で似ていることもあるせいか、随分と親近感が沸いた。

吊橋効果に似た作用も、十二分にあるのだろうか。

— けっ、この格好付け野郎が。あんな連中、俺様がのしってやったの

によー

「いや、それは失格だから」

「へ？そうなの？」

「ハンターに手を出したら失格だって。書いてあったでしょ？」

モモタロスの声に対し、つい声を上げて返してしまう良太郎。

そして…しまったと気付いた時には既に翔太郎の、奇妙な表情があった。「変な人を見る」と言うよりは、「驚いている」に近いかもしれない。

「興味深いって…おいフィリップ、頼むからゲーム中は検索かけるな……」

フィリップ？

不審に思う間もなく、翔太郎は悲鳴にも似た声を上げ…その直後、呆れたような溜息を一つ漏らしたのであった。

*

「いきなり『当たり』引きやがったのか、あいつ！？」

がたんと言う音と共に開放されたハンターを見ながら、翔太郎は悲鳴にも似た声を上げてその場からとにかく逃げる。

ドーパントに比べれば、ハンターなど恐るるに足りない存在のはずなのに、どういう訳か「怖い」と思った。

無表情に物凄いスピードで走ってきているせいかも知れない。

「翔太郎、とにかくショッピングエリアに向かうんだ。そこなら見
つかり難い」

「了解だ、相棒」

ダブルドライバーを装着しているため、フィリップと意識の共有は出来ている。

「変身」は一回だけと規定されているが、「ベルトの装着」までは禁止されていないのだから、ルール違反ではないはずだ。

とにかく、フィリップの指示通りショッピングエリアにある建物の影で、軽く一息ついて…彼はさっきの青年を思い出した。

随分と運が悪いらしい。いきなり「当たり」を引くなど。

そう思った瞬間、「運が悪い」の部分に引つかかったのか、フィリップが心外と言わんばかりの声で反論し始めた。

―「運が悪い」？何を言っているんだい翔太郎―

「あ？」

―十九人の人間がいる中で、最初に当たりを引く確率はおよそ一千回に三回。それをいきなり引いた彼は、幸運と言っても良い。実に興味深い存在だ―

くじで順番を決める際、「1」を引く確率は十九分の一。そしてその後、十九本ある鎖の中から当たりを引く確率も十九分の一。計算上では十九の二乗分の一という確率を、先の青年は引き当てたのだ。

成程、確かにここまでいくと逆に運が良いと言っべきか。

などと思っていたその矢先、大通りの様子を伺っていた翔太郎の視界に、一人の青年が映った。

件の、「運が良い」青年だ。

ぜいぜいと息を切らせながら、それでも逃げているところを見ると、ハンターに追われている最中らしい。

―翔太郎、彼を助けてくれ。僕は彼に興味がある―

「おいおい、それだとばつちり喰らったら…」

―それは大丈夫だ。ハンターは今、僕達が食い止めている―
「僕達…っってお前まさかつ！」

今回、このエリアの中にはリボルギヤリーが、自首用の乗り物として巡回している。それを利用して、フィリップはハンターに対する妨害活動を行っているらしい。

…そりゃ流石に卑怯だろうと思わなくも無いのだが、とにかくハンターがいらないと言うのなら好都合。

この先何が起こるかわからないのだ、仲間が多いに越したことはない。

思い、翔太郎は目の前まで来た「一番」の青年の腕を引き、口元を軽く押さえて低く囁く。

「静かにしてろ。要はあいつらの視界から外れりゃ良いんだろ。この場所なら見つかる心配は少ない」

相手は状況を理解したのか、こくこくと頷くと自分の口を押さえ、息を殺した。

しばらくして、ハンターの気配が消えたのを見計らうと、青年はぺこりと頭を下げる。随分と律儀な奴だ、と翔太郎の中では彼への好感度が上がった。

ハンターを放出してしまったのは仕方ない。くじ運が悪かっただけなのだろうから。

「助けてくれて、ありがとうございました。えっと…」

「俺は左翔太郎。この街の探偵さ」

「ありがとうございます、左さん。僕は、野上良太郎です」

翔太郎に一つ礼を言い、野上良太郎というらしい青年は、改めて

ぺこりと頭を下げる。

―随分と礼儀正しい人のようなね―

と、フィリップが呟いた瞬間。良太郎が小さく何かを呟いた。

「いや、それは失格だから。……ハンターに手を出したら失格だつて。書いてあったでしょ？」

まるで、誰かに言い聞かせるような言葉。

そしてその様子は、何だか「今の状態」の自分とフィリップの会話に似ている……そう思ったまさにその時。翔太郎にとっては迷惑この上ない、フィリップの心底愉快そうな声が響いた。

―興味深い。彼も誰かと意識を共有する仮面ライダーだと言うことか。これは検索してみる価値がありそうだ―

「興味深いって……おいフィリップ、頼むからゲーム中は検索かけんな……」

―キーワードは、「野上良太郎」……―

それを境に、ふつりとフィリップとのコンタクトが途切れた。

……完全に「地球の本棚」に入って、良太郎のことを検索し始めたらしい。こうなってはフィリップを当てにすることは出来ない。

深い深い溜息と共に、翔太郎は良太郎の顔を見やった。

ひよつとすると、良太郎も自分と同じような目に遭っているのではないか……そう思えて仕方が無かった……。

現在、ゲーム開始から五分経過。

獲得賞金は、六万円。
参加者は、十九人。

ゲーム開始 ― 野上良太郎、左翔太郎―（後書き）

ゲーム開始いたしました。

とりあえず今回は良太郎＆翔太郎の異種コンビです。

*

やりたい放題やってます。

勿論ハンター放出の役目は良太郎。しかもいの一番。今までの「逃走中」では無かったような気がします…こういう可能性だってあるだろう、と思いついてみました。

でも取りあえずは逃げ切ってもらおうかと。

その為、リボルギャリーで妨害行為とか…下手すりゃ失格行為ですよ…（ばれなきゃ良いんです）。

*

それではまた次回、お会い致しましょう。

MISSION・1：エリア拡大 開始―ファイズ、響鬼―

スマートレディが「アルバイト」とかふざけた事を抜かしていたのを思い出しながら、乾巧は東ミュージアムエリアに逃げ込んでいた。

基本的に、建物の中に隠れるのは禁止されているため、建物の影に身を潜めるだけにとどめる。

まさか、初めからハンター放出とか言うことになるとは思ってもしなかったが、巧が引いた数字は「15」：おそらくは自分が鎖を引く前にハンターが放出されるであろう数字だったため、特に気にはしていなかった。

：あらかじめ渡された「携帯電話」の方にメールが来ていない所をみると、今の所誰も捕まっていならしい。

ふう、と溜息を吐きながら、とにかく周囲の気配に気を配る。

ライダー以外に変身禁止ということは、ウルフルフェノクになることも禁止ということだが：それでも、感覚はそれなりに優れている。

面倒臭い、と思いつつも、普段世話になっている人物：菊池啓太郎が欲しがっていた新種の洗剤を購入し、園田真理が欲しがっていた髪きりバサミをプレゼントしてやるためにも、多少の金銭が必要になったのである。

そうでなければ、誰がこんな面倒なゲームに参加などする物か。巧の目標金額は五十万。それさえクリアできれば、あとはさっさと自首とやらをしてやろうと、上空を舞う列車を眺めながら考えていた。

その刹那。カッン、と近くの石畳を叩く足音が、巧の耳に届いた。
：ハンターか…？

いつでも逃げられるように身構えながら、その足音の主をそっと確認する。もし、見えた物が黒服のサングラス男だったら、気付か

れないうちに逃げるに越したことは無いのだから。

だが、巧の視界に入ったのは、そんな黒ずくめの男では決してなく……灰色のブレザーを着た、一人の学生だった。

「何だ、脅かすなよ」

「わぁっ」

物陰から出てきた巧に、逆に青年の方が驚きの声を上げる。

幼い顔立ちから言って、高校生だろうか。胸のワッペンには、「SB」のデザインが施されており、青年の背には大きめのリュック、首からは高そうなカメラがぶら下がっていた。

「お前も、参加者か？」

「あ、はい。尾上タクミ……スマートブレインハイスクールの学生です」

すらすらと言いながら、自分と同じ「タクミ」と名乗った青年は、ポケットから生徒手帳を差し出して自分の身分を明かす。

「はぁん。高校生のガキか」

と口では言いながら。

……いやいや、今、大分引つかかるところがあっただろうが。

と心の中で思い切りツツコミを入れる巧。

「スマートブレインで、ライダー……ってお前……オルフェノクか？」

その一言に、タクミはびくりと肩を震わせた。

どうやら彼は、自分がオルフェノクだと知られたくない……自分と同じ立場の存在らしい。何となくだがそう理解すると、巧は軽く視

線を反らしながら、一言。

「俺もオルフェノクだから、別にいいけどな」

「え…？」

「俺は乾巧、ファイズだ。お前は？」

「ぼ…僕も、ファイズ、です」

ファイズフォンを見せた巧に対し、タクミの方も自分の変身用ツール…ファイズフォンを見せてきた。

おいおい。ファイズギアが二本あるってか？

「ひょっとして…異なる世界のファイズの方、でしょうか？」

「は？異なる世界？」

よくわからない言葉を放たれ、混乱しそうになるのを堪えながら、巧はとりあえずタクミの話に耳を傾けた。

この世には幾つもの異なる世界…パラレルワールドと呼べる物が存在し、自分はその中の一つの住人であること、自分の住む世界にはオルフェノクが存在し、人間を支配しようとしていること、そして彼自身は、ファイズとして、人間を襲うオルフェノクを倒していること。

「人間とかオルフェノクとか、関係なくて…同じ気持ちを共有できるってことが、大切だと思うから」

「けどそれは…言うよりも難しいことだぞ？」

巧は知っている。人間とオルフェノクの共存は、簡単な様でとても難しいと言うことを。自分には、巧がオルフェノクだと知っていて、それでも支えてくれる人間がいる。だが、彼らを人間に殺されたら…自分がかつて失った「親友」のように、絶望せずにいられる

だろうか。

「…わかってます。だけど…僕には、支えてくれる人が…わかってくれる人がいるから」

「…ああ、そうかよ」

乱暴にそう返しながら、それでも巧はぐしゃぐしゃとタクミの頭をなで上げる。

祝福と、ほんの少しの呆れを込めて。タクミの言葉が、まるで惚気のように聞こえたからかも知れない。

「で？お前は何でこのゲームに参加した？」

「……学費が……」

「……世知辛いな、その理由……」

義務教育ではない以上、学費が支払えないのなら出て行けということなのだろう。

全く、スマートブレインの名がついた施設は、どこまでも「ファイズ」に優しくない…

苛立ちを僅かに感じながらもそう思った瞬間。

あらかじめ配られていた携帯電話が、メールの着信を告げた。そこに書かれていたのは…「MISSION・1」…最初のミッションだった。

*

「異世界、かあ…まだちょっと信じられないけどなあ…」

そうぼやいたのは、このゲームの参加者の中でも最年長のヒビキ。その脇に立っているのは、この参加者の中で最年少と言えるアス

ムだった。

傍目から見れば親子ほども年の離れたこの二人が共に行動しているのは、ハンター開放の際にヒビキが近くにいたアスムを抱きかかえて逃げたことに起因する。

流石に、あの速さの男達相手に、アスムのような子供が逃げ切れとは思えなかった。

もう一人、アスムと同年くらいの少年を見かけたのだが、そちらの方は別の青年と一緒に逃げていたのを確認している。

そして、二人は北…大風車エリアに向かって歩いていく途中、アスムから「異世界」のことを聞いたのだ。

弦の「ザンキ流」、管の「イブキ流」、そして太鼓の「ヒビキ流」の三つの流派に音撃は別たれ、アスムは唯一の「ヒビキ流の使い手」であること、彼の師から、「響鬼」を受け継いだ鬼であること、最近になってようやく、三つの流派がまた一つに纏まりつつあること。そして…道場を大きくするために、このゲームに参加して、賞金を得ようとしていることを。

一方でヒビキの方も、自分の置かれた状況を説明した。

自分が猛士と言う組織に属する鬼の一人、「響鬼」であること、その表の顔である和菓子屋「たちばな」の面々に、旅行に行つて骨休めをしてもらおうと画策していること、そして…自分にもかつて「明日夢」と言う名の弟子候補がいたこと。

「結局、明日夢は鬼にはならなかったんだけどな」

と付け加えながら、ヒビキはどこか懐かしそうにその目を細めた。異なるとは言え、アスムと言う名の少年が、響鬼として戦う世界。こんな年端も行かぬ少年に戦わせなければならぬのかと思うと、情けなく思う反面、嬉しくもあった。

「鬼ってさ、結構キツイことが多いだろ？」

「はい。確かに修行は厳しいですけど…だけど、楽しいことも沢山ありますから」

「そうだな…つとあれ？」

「どうしました、ヒビキさん？」

不審そうな声を上げたヒビキに、アスムも不思議そうに声をかけ…そして、その理由に気付いた。

……大風車エリアが、封鎖されているのだ。
入り口にはバリケードと、警官隊と思しき重装備の面々。そしてそれを指揮しているのは、一人の女性だった。

「えーっと…ひよつとして、ここ、封鎖されてる？」

「悪いわね。ここと南のシーサイドエリア、それから特設ステージは現在封鎖中よ」

紺色の制服を身に纏い、気の強そうな表情で返してくる女性。漆黒の長い髪は、後ろで一部を残して結わえられており、キャリアウーマンと言う印象を受ける。

どうやら現在、逃げられる場所は中央エリア、西のショッピングエリア、そして東のミュージアムエリアだけど、東西にしか逃げられないらしい。

「うーん、弱ったぞ少年…」

「そうですね。いつか開放されるんでしょうか？」

「…それは、あなた達の頑張り次第ね」

アスムの言葉に、目の前の女性が不敵な笑みと共にそう返した瞬間。

二人の持っていた携帯電話が、メールの着信を告げた。
タイトルは…「MISSION・1」。

ミッションその一：エリア拡大

…君達にエリア拡大のチャンスを与えよう。

現在、北の「大風車エリア」、南の「シーサイドエリア」、そして「特設ステージ」が封鎖されている。この三ヶ所を開放するためには、残り時間五十分までの間に、「中央エリア」にある「ブレイド食堂」の三人娘（アイ、マイ、ミイ）から、それぞれ「G4チップ」、「グロングの羊皮紙」、「焼肉の無料券」を受け取り、封鎖責任者（八代陶子、八代藍、小沢澄子）に手渡さなければならない。なお、ミッションに参加する、しないは君達の自由だ。

「えーっと、つまり…？」

「この場所を開放するには、一度中央エリアに行って、『G4チップ』を貰い、この私…八代陶子に渡してもらわなければならないの」

につこりと笑いながら放たれた言葉に、ヒビキは一瞬だけ考え込み…

「どうする、少年？」

「ここは、開けるべきですヒビキさん。少しでもハンターとの遭遇率を下げるためにも」

「だよなあ…」

現在残り時間六十五分を少し切ったところ。往復で十分もかからないとは思うが…どこにハンターが潜んでいるかは不明なだけに、少し余裕を見た方がいいかも知れない。

今から行って、ギリギリと言ったところか…

「とにかく、行動してみるか。行くぞ、少年」
「はい、ヒビキさん！」

嬉しそうに頷くアスムを見つめながら、ヒビキは軽やかな足取りで中央エリアに向かって駆け出して行ったのである。

現在、ゲーム開始から十五分経過。

獲得賞金は、十八万円。

参加人数は、十九人。

…エリア拡大ミッション終了まで、あと十五分…。

MISSION・1：エリア拡大 開始―ファイズ、響鬼―（後書き）

いやいや、思ったよりも早く書きあがったので早速投稿。
最初のミッションが来ましたよー。

*

最初のミッションは、ある意味お約束のエリア拡大。
封鎖地点には二人の八代刑事と小沢さんがいらっやいます。そしてそれぞれに対応した物を渡さなければ、エリアは開放されない！
何このキツツイ条件！？

*

えーっと、エリアの形の説明は前回もしておりますが、とりあえずここでももう一度説明を。

まず、羽根が四つある風車^{かざぐるま}を思い浮かべてください。

上の羽根に当たる部分が「大風車エリア」（封鎖中）、右の羽根に当たる部分が「ミュージアムエリア」、下の羽根に当たる部分が「シーサイドエリア」（封鎖中）、左の羽根に当たる部分が「ショッピングエリア」で、中心部分がそのままの「中央エリア」になります。

最後に風車の棒にあたる部分が、「特設ステージ」（封鎖中）になります。

そこを現在、四人のハンターがうろついている訳です。

*

はてさて、このミッション、果たしてクリアできるのか。
と言うかそもそも誰がクリアするのか。

とりあえず動き出したヒビキさん&アスム君ペア。いるのが「姐さん」と知って、「彼」が動かない訳が無い（と思う）！

*

それでは次回、またお会い致しましょう。
今度はミッション参戦編です。

*

2010年3月30日

誤字とエリア拡大アイテムの名前修正。

「グロンギ語の書かれた羊皮紙」では無く、「グロンギの羊皮紙」でした。

グロンギに、「文字」の概念は無かったことを失念しておりました。

MISSION・1：エリア拡大 終幕 ―クウガ&アギト―

中央エリア、「ブレイド食堂」の前。

ミッシヨンのメールが来た時、彼…小野寺ユウスケは、丁度その場所にいた。

そして…同時に驚きもした。

何故か、死んだはずの「姐さん」…八代藍刑事の名前が、そこに書かれていたからだ。

「何で…何で姐さんが!？」

「何でって…これ、お祭りですから」

混乱するユウスケに答えたのは、この食堂の従業員の一人。無邪気な笑顔でそう言われてしまうと、何故か妙に納得できてしまった。…そっか。お祭りだから、姐さんもいるのか、と。

それならば、彼がやるべきことは一つ。彼の行動の原動力…その根底にあるのは、「八代藍の笑顔」だ。きっとここでミッシヨンをクリアしたら、彼女は自分に笑顔を向けてくれる。

懐かしい、暖かい笑顔を。

だから…

「ねえ、『グロンギの羊皮紙』、くれる？」

「はい。『グロンギ』入りまーす!!」

いや、その言い方はどうかと思うけど。

心の中でのみ突っ込みつつ、ユウスケは奇妙な絵の描かれた羊皮紙を受け取ると、注意深く周囲を見回してから、南の方…シーサイドエリアと呼ばれる場所に向かって駆け出す。

現在、残り時間六十二分三十秒。制限時間まであと十二分半と言

ったところか。

動けばハンターに出会う可能性が上がるが、八代に会えるのならそんなリスクは安い物だ。幸いにも、現在はハンターの姿は確認できない。

噴水の脇を抜け、建物の影や曲がり角などに十分注意を払いながら、ユウスケは慎重に進んで行った。

最初の説明によれば、ハンターは待ち伏せをしない。そもそも彼らは、参加者達に下されているミッションを知らないため、待ち伏せのしようなど無いらしい。

いるとしたら、それは「偶々」そこを見回りに来ていたに過ぎないそうだ。

ある程度まで進み、ベンチの影に隠れながら、次の曲がり角の先を覗き込むと……そこには、黒いスーツ姿の男が、無表情に周囲をゆっくりと見回している。

ハンターだ。

「うわ……いるよ、ハンター……」

自分にしか聞こえない程度に呟きつつ、相手の様子をじつと窺う。どうやらこちらには気付いていないらしい。悠然と歩きながら、ハンターはユウスケに気付かずそのまままったく別の方向へと歩き去ってしまった。

―良かった―

ほっと胸を撫で下ろしながら、ユウスケはそそくさとその場を後にする。いつハンターが戻ってくるかわからない以上、とにかくエリアを広げた方がいい。全部のエリアが開放されれば、単純に考えて、今の倍……とまでは行かないが、五割増くらいの広さにはなるだろう。

そう考えながら、とにかくユウスケは前に進む。

時間的にはまだ余裕がある。封鎖されている場所は今の所まだ見えてこないが、与えられている地図と周囲の景色から考えて、そう遠くは無いはずだ。

思い、彼はふとはぐれてしまった友人…土のことを思い出した。

彼は今、どこにいるのだろうか？

そんな疑問が沸き起こり、そして自身には余裕があるせいか…彼はあらかじめ渡されていた「携帯電話」で土に連絡を取る。

…このゲームでは、参加者同士の連絡の取り合いが可能らしい。現に、この携帯電話のメモリには、参加者の連絡先が登録されている。

その中の「門矢土」を選択し、彼はコールを鳴らしてみる。そう待たないうちに、コール音が鳴り止んだ。

「あ、土？俺だけど？」

『オレオレ詐欺なら間に合ってるっ』

「違うよ！大体今は『振り込め詐欺』だし…ってそうじゃ無くて！ユウスケだよ！！…あのさ、ミッションなんだけど…」

『悪いが俺は不参加だっ』

「…まだ全部言っていないだろ。けど何で？」

『…ハンターに追われてるんだよっ』

「えええっ！？」

『もう良いか？切るぞ。お前はせいぜいミッション頑張って、八代刑事に誉められて来い』

そう言うと同時に、電話口からはツー、ツーと通話の途切れたことを示す音が鳴り響く。

どうやら土は、宣言通り通話を切ったらしい。

「そうか…追われてるのか、土……」

だから語調が荒かったのか。
その割には、随分とユウスケのことは見透かしていたように思うのだが。

まあ、とにかく。ハンターのうち一体は、土を追いかけるのに必死なようだし、少しは遭遇する確率が減ったと考え…彼は真っ直ぐに、南のシーサイドエリアに向かって行くのであった。
残り時間六十分。エリア拡大可能まで、あと十分…。

*

「あ…ヒビキさん、あの人…」

「おお、青年。どこ行くんだ？」

「…エリアを開放しに。『G4チップ』を手に入れたからな」

ゲーム開始から二十分ほど経過した頃、前方から現れた子連れのように見える二人組に問われ、彼…芦河ショウイチは、持っている小さなチップを二人に見せた。

G4チップ。かつて彼の恋人であり、今回のミッションのクリア条件になっている存在…八代陶子が作った、対アンノウン用パワードスーツの強化チップ…のようなものである。

以前、自称トレジャーハンターの男に盗まれたと言っていたので、おそらくこれはよく出来たレプリカなのだろう。

このゲーム用に、こしらえた物なのかもしれない。

「お？それじゃあ今ならハンターがいらないから、ミッションクリアできるな」

「何でわかる？」

「僕達、その大風車エリアの前からここまで来たんです。ミッションに参加しようと思って」

にこにこと笑顔で言いながら、目の前の少年…確か、アスムとか言った記憶がある…が答える。

成程、この二人は共に行動しているのか。確かにそれは、ある意味賢い選択かもしれない。

二人一組の場合、ハンターに見つかる確率も上がるが、逆にこちらが先手を打つ…即ち、ハンターの姿を見つけて、さっさと逃げることも可能なのだ。卑怯ではあるが、どちらか片方を犠牲にして、片方だけが生き残ると言う手段もある。

ただ、シヨウイチの場合…自慢ではないが逃げるのも隠れるのも得意とする分野である。伊達にギルスであった時にひたすら人目を避けた生活はしていない。

…今でこそ、警視庁未確認対策班と言う、ある意味花形の職業についてこそいるが。

そもそも、今回の「ゲーム」に参加した理由は……自分が配属される前までに生んでしまった、「G3プロジェクト」によって出てしまった損害を賠償する「ため」。

何で以前の連中の失態を自分が贖わねばならないのかは疑問に思わなくもないが、「あなたが勝手に未確認対策班を辞めたから」と八代陶子に言われ、渋々参加しているのである。

正直、このゲームで得られる満額すらも、雀の涙、焼け石に水程度なのだが…あるに越したことはないので、参加しているのだ。

まあ、とにかく。エリアが広がれば、それだけ逃げ切れる可能性が上がる。それだけは確かなことなので、シヨウイチはとりあえずこのミッションに参加したのであった。

「おい、少年に青年」

「何ですか？」

「どうした？」

唐突に上げられた男…確かヒビキと呼ばれていた…の真剣な声に、シヨウイチは不審そうに眉を顰める。

妙な予感がする。

アンノウンと遭遇する時にも似た、怖気にも似た「何か」が、シヨウイチの頭にも警報を鳴らす。そして、その理由をいち早く知つたらしいヒビキは、すつと自分の後ろを指差すと……

「……ハンターだっ！」

言うが早いか、ヒビキはアスムを抱えて脱兎の如く駆け出していく。

同時にシヨウイチも、弾かれたようにその場から逃げる。折角開放のためのツールを手に入れたのだ。ここで捕まってしまうては時間のロスになるし、何より賞金がゼロになる。

それにしても…と、逃げていくヒビキを見ながら、シヨウイチは感嘆の溜息を漏らした。

子供とは言え、人一人抱えてハンターと遜色ないスピードで逃げる事が出来るとは。人間の可能性というものはとことんまで未知数なのだなあと感心する。

そう言えば、アスムやワタルと言った最年少参加者も、変身するといきなり体の大きさが変化した記憶がある。あれは一体どうなっているのか、正直気にはなるのだが…今はそれを暢気に考えている場合ではない。とにかく遠くに見えるハンターから逃れ、大風車エリアを開放することが先決。

ヒビキの見つけたハンターの姿はないため、おそらくはヒビキ達に標的を絞ったのだろう。

すまないと思う反面、罔になってくれてありがとうと言う気持ちもあった。

「……注意しながら、進むとするか」

やれやれと首を横に振りながら、シヨウイチは極力気配を殺して大風車エリアに向かって小走りに駆けて行ったのである。

…残り時間、五十五分。エリア拡大可能まで、あと五分…

*

「はい、『焼肉の無料券』です」

特設ステージの前で、息を切らせ…それでもにつこり笑顔とサムズアップをしながら、チケットを差し出したのは、津上翔一と五代雄介の二人組だった。

片や暖簾分けした弟子への祝金のため、そして片や次の冒険に出るため、今回彼らはこのゲームに参加したらしい。

ちなみに翔一の目標金額は満額、雄介の目標金額は八十万。

ゲームスタート時から、何となく逃げた方向が一緒だったこともあり、彼らは今の所共に行動しているらしかった。

ちなみに現在の残り時間は五十分三十秒。ぶっちゃけて言えばギリギリのラインだ。

雄介の、「一緒に冒険しませんか？」と言う誘いに、「あ、良いですね」と軽い感じで翔一が乗り、時にハンターに追われ、時にそのハンターを別の人に押し付け、そして時に時間を気にしながらこの特設ステージまでやってきたらしい。

目の前に立つ女性警官…小沢澄子はどこか悔しそうにその顔を顰めたが…

「ま、ルールはルールだしね。エリアは開放するわ」

ひったくるように「焼肉の無料券」を懐にしまうと、彼女は後ろにいる警官達に指示を出してバリケードを解除させた。

「でも、何で焼肉なんですか？」

「餓えてるのよ。悪い？」

きつと睨みつけるような鋭い視線を、聞いてきた五代に向けつつも、彼女はてきぱきとバリケードの残骸を排除していく。

もはや完全に、バリケードなど最初から無かったかのようなうだ。

「それじゃ皆、焼肉に行くわよ。ついでに、今日は飲み放題だから了解です！！」

完全に撤去し終わったのを確認すると、彼女は部下らしき警官達にそう告げる。

…一体あの無料券は何人まで有効なのだろうか、と不思議に思わなくも無いが、何分にもゲーム中なので黙っておくことにした。

「ちゃんと野菜も食べて下さいねー」

「……………考えとくわ」

「考えるだけで終わらないで下さいね」

特設ステージ内へと入っていく翔一と雄介の言葉を無視し…小沢澄子と愉快的仲間達は、その場をルンルンで去っていった。

…完全に、翔一の言葉など耳に入っていない様子で。

……飲酒運転はしないですよ、いくらなんでも……

と不思議に思う雄介ではあったのだが。

そして…残り時間、五十分。その瞬間に、メールの着信が入った。

ミッションその一：エリア拡大結果発表

芦河シヨウイチ、小野寺ユウスケ、津上翔一の活躍により、「大

風車エリア」、「シーサイドエリア」、「特設ステージ」が開放された。

現在、ゲーム開始から三十分経過。

獲得賞金は、三十六万円。

参加人数は、十九人。

…とりあえず、まだ誰も捕まっではないらしい…

MISSION・1：エリア拡大 終幕 ―クウガ&アギト―（後書き）

誰が個々人のドラマなんか書くもんか。
と言っ訳でどうも、秋月です。

*

気が乗らないですよー、恋愛要素。ですので、ユウスケのクリアの下りやショウイチのクリアまでの道筋はばっさりカットです。
「逃走中」は視点転換をしながら、時間軸に沿って放映するんですが、文章でそれをやるとそれだけでなくともややこしい文章が更にややこしくなり、混乱するので止めました。

*

「姐さん」

「姐さんって呼ぶなって言ってるでしょ！」
スパーン

*

…って文章も入れたかったんですが、そこはお隣の焼肉にかき消されました。

ブレイド食堂に、二人の「八代刑事」、そして「焼肉大好き小沢さん」…

しまった！キャラが皆強すぎて濃い味になってしまった……！

*

それでは、また次回お会い致しましょう。

開始三十分 ― ブレイド&キバ ―

「ミッションその一」の結果発表のメールが届いた物の、それを見る事が出来ずにいた人物達がいる。

…ハンターに、現在進行形で追われている者達だ。

エリアに解き放たれているハンターは四体。そのうち三体が、参加者を追っていた。

一体の視界の先には門矢士、もう一体の視界はヒビキ、そしてもう一体の視線に捉えられていたのは…

剣立カズマだった。ちなみにこれ三分は逃げ回っている。

なまじ「仮面ライダー」としての体力があるせいか、ハンターとは付かず離れずの距離を保ったまま逃げ回っているのだが…

流石に、体力の面を考えるといつかは捕まる。あと五十分も今のペースで走り続ける自信は無い。

―何で見つかったんだろう!?―

出来る限りハンターの視界から逃れるよう、右へ左へと角を細かく曲がりながら、カズマはガシガシと頭を掻いた。

ハンターに見つかる理由など、わかる訳が無い。偶々遭遇してしまった、と言うだけなのだから。

ここまで来て、最初の犠牲者になるのはごめん蒙る。いくら大企業、「BOARD」の「エース社員」と言っても、最初に捕まるとなんて不名誉な「一番」は避けたい。

出来ることなら捕まりたくないのだが。

そもそもカズマがこのゲームに参加した理由は、BOARDの社員食堂のメニューの充実化を図るためだ。

社員全員が、平等にメニューを選べるようになって以降、仕入れに苦労するようになってしまった。それまでは最大三食だけだった

「エースランチ」がいい例だ。「エース専用」のランチであるだけに、仕入れ値も手間もエース級。それを社員は容赦なく注文するものだから…仕入れにとんでもない労力が必要となってしまった。

故に、「キング・クイーン・ジャック」や「それ以下」のメニューを少しでも充実させ、一番高い…そして利益率の薄いエースランチから社員の目をそらそうとする、ある意味卑怯な手に打って出ようと考えたのだ。

満額あれば、ある程度華美な「それ以下ランチ」を作ること可能だろう。

が。そんなことは、今のカズマにとってどうでもいいことだ。とにかく逃げるのが先決なのだから。

いっそのこと変身して、マッハジャガーのカードで加速して逃げ切ろうかとも思ったのだが…変身できるのは一回きり。それも十分間だけ。出来ることならもう少し後でこの「切札」を使いたい。

右に、左に、そしてもう一度左。

何度と無く角を曲がり、ハンターを翻弄しながら…カズマは、ひたすら逃げ回った。

その時だっただろうか。角を曲がった彼の目前に、人影が現れたのは。

その人影がハンターなら即アウト。

カズマは僅かにスピードを落とし、相手にぶつからぬよう、大きく横へと跳んでその人影との衝突を避けつつ、相手の正体を見極める。

黒スーツであれば方向転換して即逃げる。そうでないのであれば、言い方は悪いがスケープゴートになってもらって乗り切る。

そう心に決め、アンデッドとの戦いで培った動体視力で相手を確認すると……

金色のコウモリのような生き物を連れた泣き黒子の青年だった。自分の急な登場に驚いたのか、相手はびくりと身を硬くし、一歩だけ後ろに下がった。

「何ビビッてんだ、渡〜？」

「は、ハンターかと思って……」

ワタル？

茶化すような金色コウモリの言葉に、カズマは記憶をフル回転させる。確か、かつて戦った「キバの世界」のキングが、そんな名前だったような気がする。

同時に、その存在が小学生くらいの小生意気な少年だったことも思い出したが。

となると、この青年は今回の参加者のうち、もう一人の「ワタル」

…「紅渡」とか言う奴だろうか。

そう思う間もなく、カズマの横を並ぶように、渡がぴったりと付いてきていた。

「あの、何で走ってるんですか？」

この状況でそれを聞くか！？

心の中で突っ込みつつ…そしてハンターとの距離を確認しつつ、カズマは端的に一言。

「追われてる」

「追われてるって…」

「渡！後ろの方にハンターだ！この兄ちゃん、ハンター連れでこっちに来やがったみたいだぜ」

渡が問いかけるよりも先に、金色コウモリこと、キバットバット三世が慌てたように叫んだ。その言葉に、カズマも黙ってこくりと頷く。

あのまま呆然と立ち尽くしてくれていたら、こいつ囷に逃げ切れ

たのにと、そんな邪なことを考えながら。

「今度のニスの材料は、結構高いのに……」
「…ニス？」

ニスと言えば艶出しに使う、あのやたらとシンナー臭いあれだろ
うか？

思いながら問いかけると、渡は真顔で頷いた。

「バイオリンのニスです。僕、父さんのバイオリンを越えるバイオリンを作りたくて…それで、その材料を買おうと思ってこのゲームに参加したんですけど」

バイオリンに、ニスなんて塗ってあるのか。

と言うか、バイオリンを手作りとは。ライダーのくせに随分と奇妙な奴だ。そう言えばワタルも、バイオリンケースを抱えていたような記憶がうつすらと……

と思うカズマを他所に、少し後ろをバツサバツサと飛んでいたキバットが、どこか不吉な「何か」を感じたらしい。不安を隠そうともせず、渡に声をかけた。

「おい、渡？一応聞くけど、今度のニスの材料って……」

「この間兄さんにご馳走してもらったんだけど…キャビアを使おう
と思って」

「アホかあああいつ！」

……すっこーん……

軽い音がした。どうやらキバットによる渾身のツッコミが、渡の頭を直撃したらしい。

まあ、キバットの気持ちも痛い程よくわかるのだが。

世界の三大珍味を、バイオリンの二スにするなど、聞いたことが無い。と言うか、どれだけ高価なバイオリンを作る気なのだ、このなよつとした青年は。

そもそもこいつの「兄」は、何を考えてキャビアなんぞご馳走したのだろう。どんなブルジョワだ、兄。

と心の中で突っ込みの嵐を巻き起こしつつカズマは、ちょっと涙目になりながら頭をさすっている渡を見やる。

「痛いよ、キバット」

「『痛いよ』じゃねえ！いつからそんな贅沢者になったんだお前は！お父さん、そんな子に育てた覚えはありません！」

「キバットは父さんじゃないでしょ」

「問答無用！そこはノリだ！」

足を止め、往来の真ん中で喧嘩…と言うか言い合いと言うか…をはじめの渡とキバット。

…他人のことでありながら…そしてかつては囷にしてやろうと考えておきながら…カズマは心配そうに彼らを見やり…

「おーい、お前らー。喧嘩してる場合じゃ…」

「部外者は引っ込んでいて下さい」

「部外者は引っ込んでろ」

「はい、すみません」

綺麗に重なった声に、条件反射的に謝り…そして、カズマは再び走り出す。

……何しろ、ハンターに追われているのだから……

「残り時間、四十六分二十七秒。ミュージアムエリア、フラワーガーデン付近で紅渡を確保。残り十八名」

*

「じゃあ、ワタルは新しいライダーシステムを開発する資金を稼ぐために？」

「ああ。ライジングイクサを開発するのに、もう少しだけ資金が必要なんだ」

「だけど、市民にこれ以上負担を強いる訳には行かないし。」

そう付け加えて呟く少年、ワタルを眺めながら、剣崎一真はにこりと微笑んだ。

最初のハンター開放から今まで、一真は彼を連れて逃げ回っていた。

ミッションにも参加しようと思わなかった訳ではないが、行く先々でハンターの影に遭遇。仕方無しに隠れながらの逃亡を繰り返していたのである。

幸いにも、ハンターに見つかって全力疾走、と言う状況は、今の所存在していないが。

ようやく落ち着いたので、一真とワタルは互いの境遇を話していたところだ。

ワタルは、「キバの世界」と呼ばれる場所から来た存在であること、そこでは「ファンガイア」と呼ばれる、人の生命力を糧に生きる種族と人間が共存していること、ワタルはその世界で、人間とファンガイア両方を統べる「キング」であること、そして…掟を破るファンガイアへの対抗策の一つであるライダーシステムを完成させるため、このゲームに参加しているのだそうだ。

一方で一真も…かつてアンデッドと戦っていたこと、紆余曲折あ

り、自身もアンデッドになったこと、そして…己がこのゲームに参加する理由も語った。

…己の中にある「ジョーカー」に負けなかったためという理由を。

「…意味がわからない。何故ゲームに参加することが、ジョーカーに負けない理由になるんだ？」

「俺はまだ…気を抜くと、ジョーカーの闘争本能に支配されそうになる。それはつまり、『ライダー以外の物』に変身してしまうってことだろ？」

ハンターに捕まるかもしれないという極度の緊張の中で、一度もジョーカーにならずにいること。

それが一真の、ゲームに参加する目的だ。このゲームでは、ライダー以外の物に変身する…一真にとってはジョーカーになった時点で、失格なのだから。

アンデッドとなった身に、賞金は要らない。ただ、ハンターに追われ、逃げ回ると言う極限の緊張状態の中、どこまで「自分」を保っていられるのか…それだけが知りたかった。だから、このゲームに参加した。

「賞金には興味ない…って言ったら嘘になるけど、一番の目的じゃないからなあ…」

「それじゃあ、クリアしたら、賞金はどうするつもりなんだ？」

「そうだなあ…ワタルにやろうか？」

「…は？」

きょとん、とした表情で、ワタルは一真に声を返す。

金銭に執着しないにも、程がある。このゲームで得られる金銭は、決して安くは無い。

現に、今の時点で獲得賞金は四十万近い額を示している。普通の

会員の月給よりも、高いくらいではないだろうか。

その倍以上の額を、彼はあっさりとワタルに渡すと言う。

正直、裏があるのではないかと勘繰ってしまうが…一真の表情は真剣そのもの。悪意の欠片もないのが見て取れる。

「人間を守るのが、仮面ライダーの仕事だからな。ワタルがその金を、『人間を守ること』に使って言うなら、その方がいいと思つてさ」

にこ、と本気らしい笑顔をワタルに向けて言う一真に、呆れにも似た視線を送るワタル。

……この男は、ユウスケと同じ馬鹿みたいに真っ直ぐなのだと、理解してしまったからだろうか。

だが、次の瞬間。一真の顔が真剣な物へと変化した。

……ハンターだ。しかも、相手もこちらを見つけたらしい。それはもう不気味としか言いようの無い速さと無表情で、一直線にこちらへ向かってかけて来ている。

不味いと思うと同時に、一真はワタルを抱きかかえるようにして駆け出すが…そんな彼らの前方からも、ハンターの、姿。

完全に、挟まれた。

そう理解すると同時に、一真は…近くの細い道に、ワタルを隠すように押し込めた。

この道は、大人が通るには少々厄介な細さだが、子供のワタルには道幅に余裕がある。

「ワタル、この道を使って逃げろ！」

「一真！？」

「早く逃げろ！人を守るために、このゲームに残らなきゃいけないんだろ！王がこんな所で捕まってどうするんだよ！？」

俺はここで、リタイアみたいだ、と軽く笑いながら。一真は必死にワタルを奥へと押し込める。その思いが届いたのか、ワタルは悔しげにその拳を固め…

「恩に、着る」

とだけ呟くと、一真の願い通り、その細い道を抜けてハンターのいない場所へ向かって逃げていった。

―残り時間、四十五分三十二秒。特設ステージ付近で剣崎一真を確保、残り十七名―

紅渡、剣崎一真の確保情報が、参加者の携帯に届いた直後。
……二回目のミッションのメールが、彼らを追い詰めることとなる。

現在、ゲーム開始から三十五分経過。
獲得賞金は、四十二万円。
参加人数は、十七人。
二回目のミッションが開始する。

開始三十分 ― ブレイド&キバ ― (後書き)

こんにちは。

今回ようやく捕まりました。

…ええ、渡と一真が。

*

誰を最初に捕まえようかと悩んだ結果、あまり深刻な理由でない二人を選んでみました。

片や、「ニスの材料費」、片や「自分の限界を知る」。

ニスの材料は今まで通り拾ってください。

己の限界を知りたきゃ、山籠りでもして熊とバトルやってりゃ良からう、と。

…勿論、この二人を牢獄行きにするのは、涙を呑んでのことですよ？
決してノリノリで「お前ら二人牢獄行きじゃあああつ！」なんて言うてませんよ？（嘘臭い）

*

さて、今回はミッション2。このミッションは、ある意味二種類同時進行…みたいな感じのミッションになっております。

…自分で設定しておきながら、随分と厳しい条件だなあと思う次第です。

*

それでは皆様、また次回、お会い致しましょう。

MISSION・2：ハンター&エネミー解放 ― 龍騎、カブト ―

ミッションその二：ハンター&エネミー放出

たった今、中央エリア北口に三体のハンターBOXが、南口に二体のエネミーBOXが設置された。

残り時間三十分になると、ハンターとモンスターは解放たれる。これを阻止するには、エリア内のどこかにいる、照井竜、三原修二、一条薫のいずれかから、ハンターBOXの鍵を特殊ツールと交換し、ハンターを封印する必要がある。

また、エネミーは、参加者が二人同時に変身し、制限時間内にBOXごと破壊する必要がある。

エネミーに捕まった場合、失格にはならないが、その時点までの賞金は没収される。

なお、ミッションに参加する、しないは君達の自由だ。

「これ以上ハンターが増えるのか!？」

開放されたシーサイドエリアで、ミッションのメールを見た城戸真司は、思わずその場にうずくまるようにして頭を抱えた。

現在、ハンターは四体。すべて解放されれば七体となり、捕まる確率はぐんと上がる。

かと言って、自首の権利を放棄してまでハンター開放を阻止する勇氣は無い。

正直、自分がこのゲームに呼ばれた理由すらわからないのだ。

「仮面ライダーの皆様へ」と書かれてはいたものの、自分はそんな大層なものではない。と言うか、そもそも仮面ライダーなど都市伝説であり、実在しない……と、思っていたのに。

自分の目の前にある、董色の手足を持つ「城」は間違いなくドラゴンだ。おそらく、自首者を受け入れる存在の一つ……「キャッスルドラゴン」とか言う物だろう。

今回のゲームに参加することになった経緯だって、届いた手紙を編集長に見せて相談したら「よし、取材して来い」と言われたが為だ。

勿論、賞金を獲得して今まで「花鶏」に対する未払いのツケを一気に返済することも狙ってはいるが、現時点でツケを払っても十分お釣が来る金額を稼いでいる。

今なら自首が出来る。と言うか、自首のチャンスは今しかないかもしれない。

だが、最後まで取材をしないと編集長の雷が落ちそうだ。

そんな風に、悶々と悩む真司の前に。真司と同じ、青いジャケットを着た茶髪の青年が、ひょいと顔を見せた。首からは結構高そうなカメラをぶら下げている。

ハンターでないことはわかる。おそらくは参加者だろう。

「参加者の人…だよな？」

「ええ。ああ、俺は辰巳シンジ。写真、良いかな？」

恐る恐る聞いた真司に対し、シンジと名乗った青年はそう問いかけると、ぱちりとカメラのシャッターを切る。

シャッター音でハンターに気付かれるのではとビクつくが、どうやらこの近くにハンターはいないらしい。ほっと胸を撫で下ろすと今度はシンジをまじまじと見つめた。

彼も、仮面ライダーなのだろうか。見た感じは普通の青年に見えるのだが。

「えーっとそれで…あんたの名前は？」

隣に腰を下ろし、シンジがにこやかな笑みと共にそう問いかけてくる。

そこでようやく、自分が名乗っていないことに気付き、真司はばつの悪そうな表情で後ろ頭を掻き…

「俺は城戸真司。真実を司るって書いて、『真司』だ」

「同じ名前なんて、凄い偶然だな。どんな仮面ライダーに変身するんだ？」

「いや、俺…ライダーじゃないし……」

シンジの問いに、困ったように眉を顰め、真司は言葉を返す。

スタッフを名乗る「何者か」から送られてきた物は、携帯電話と特殊ツールらしい一枚のカードとこのエリアのマップ。そして…一セットのカードデッキだった。

金色でドラゴンらしい模様の書かれた黒いケースの中には、何枚ものカードが入っていた。その中には、特殊ツールに良く似たカードもあったが、それが何を意味するのかはわからなかった。

「何かの間違いだと思っただよなあ、俺がこのゲームに招待されたの」

ふう、と溜息を吐きながら、真司は送られてきたカードデッキを懷から取り出し、眺める。それを見るや、シンジは驚いたように目を見開き…

「それ…俺のデッキと同じ……！？」

「へ？」

「それ、龍騎のデッキだ」

「りゅ…りゅうき？」

シンジの漏らした「龍騎」と言う単語に、真司は何故か聞き覚えがあるような気がした。

いつ、どこで聞いたのかはわからない。ただという訳か、彼の頭の中には赤い鎧を纏った騎士の姿がイメージされる。そして、それが「龍騎」だと、不思議と真司には理解できた。

「何だかよくわからないけど、これを持てれば、その龍騎になれるって言うのは、分かった。……それよりもさ」

「…何？」

「お前、ミッションどうする？」

「……ああ。そう言えばあったな、そんな物」

真司の問いに、軽く目を反らしながらも、シンジは苦笑と共に言葉を返す。

「俺もなあ…目標金額達成してるんだよ。壊したカメラを弁償できるくらいは……」

「本体に二十万、レンズで十五万するもんなあ」

「よく知ってるな、真司」

「俺も何度が壊して、編集長の雷を食らいまくったことあるから、わかるんだよ」

「編集長って……真司もジャーナリストなのか？」

「『も』…ってことは、シンジも？」

名前だけでなく、職業も同じとは。偶然なのか仕組まれたことなのかは不明だが、何となく互に通じ合う物があったらしい。

そんな場合ではないとわかっていながらも、彼らは暢気に感動していた。

もつとも…片やさぼりの常習犯、片や賞を取ったことすらあるフトグラフィアーなのだ。

などと、彼らが感動していたその時。ふと気がつくと、視界の先に何か箱のような物が見えた。

どうやら今まで、キャッスルドランの影になって見えなかったらしい。箱はまるで、ハンターBOXのようにも見え、二人は思わずびくりとその体を震わせるが…目を凝らしてみると、そこにいるのは黒スーツ姿のハンターなどではなく…薄茶色のスーツを身に纏った、中年の男性だった。

僅かに目を伏せ、立ったまま眠っているようにも見えるその男に…シンジは見覚えがあった。

かつて自身の上司でもあった存在。そして、自分の世界に入り込んだ、「人の姿を模った、人にあらざる者」……鎌田と呼んでいた存在。

何故、と思ったのはほんの一瞬だけ。すぐに鎌田の入っているその箱が、ミッションメールに来ていた「エネミーBOX」だと気がついた。何しろここはシーサイドエリア。メールにあった「中央エリア南口」にほど近い場所なのだから。

「な…何で人が？」

「真司、あれを人だと思うな」

「……は？」

鎌田の姿を見て、かつての彼の悪行を思い出したのか。シンジは険しい顔で真司に答えながら、ゆっくりとポケットからカードデッキを取り出した。

「シンジ！？何する気なんだよ！？」

「あれは、エネミー…敵だ。開放される前に倒す」

すたすたと迷う様子も無くエネミーBOXに近付きながら、シンジは近くの窓ガラスに自分の姿を映し出す。

……己が、龍騎に変身するために。

*

「おばあちゃんは言っていた。天の道を往き、総てを司る男…天道総司、とな」

やや垂れ目気味の、軽くウェーブのかかった髪の男が、彼…ソウジに向かって尊大な態度で言い放った。

どうやら、自己紹介をしてくれているらしい。同じ名前でありながら、かなりの「俺様」だと思う。

「お前は？」

「俺は…ソウジ。仮面ライダーカブトだ」

ソウジが言うと、どこからとも無く彼のカブトゼクターが飛んでくる。

どうして変身解除できたのか、どうやって暴走したクロックアップから抜け出せたのか…そこは良くわからない。ただ、この「お祭り」を企画した何者かが、暴走したクロックアップシステムを押さえ込んだ…と思うことにした。

それ故に…彼がこのゲームに参加した理由は、一体どうやって、自分の暴走を止めたのか…その方法を知るためであった。

ソウジも人間だ。賞金に興味が無いわけではない。満額あれば、多少なりとも彼の祖母が営む「天堂屋」と言うおでん屋も少しは楽になるだろう。「行列の出来るお店」と言うわけではない以上、余裕があるとは言い切れないのだから。

「ほう？お前もカブトか」

「俺も……？」

すうっと目を細め、楽しそうに言う総司の言葉の意味を、ソウジは不思議に思う。だが…すぐに、理解した。

彼の手の中に納まった、自分とは別のカブトゼクターの姿を見て。

「そうか…異なる世界の、カブト……」

「そう言うことだ。おばあちゃんは言っていた。世界は無数に存在する。だが、天の道を往くのはたった一人しかない…ってな」

ゆっくりと人差し指を天に突き出しながら、総司は堂々と言い放つ。

彼の言う「おばあちゃん」と言う人物像が、どこと無く自身の祖母と重なって、親近感が沸く。

ソウジにとって祖母が天上の人であるように、彼にとってもまた、祖母は天上の…尊敬に値する人物なのだろう。言葉の端々から、その様子が伝わってくる。

「それで？お前はミッションに参加するのか？」

「ああ、ハンター解放のミッションだろう？自首する気は無いから行くつもりだが……」

総司の問いに答えつつも、ソウジは軽く眉を顰める。

特殊ツールと交換で、ハンターを封印する鍵を手に入れることができる。自首をする気などさらさら無いソウジにとって、別にその条件は大したことは無いのだが…問題は、「鍵を持っている人物」にあった。

そう。記載された人物の顔を知らないのだ。

照井竜？三原修二？一条薫？誰だ、それはと言う感じた。

首からネームプレートでもぶら下げていると言っのなら話は早いのだが、そんなはずも無い。とりあえず、片っ端から声をかけ、名

前を聞いている状況だ。

「そう言うお前は？参加するのか？」

「当然だ。俺も自首などするつもりは無い。ハンターごときに俺を止められるとは思えないが、増えられても厄介だから」

総司も、不敵な笑みで言葉を返す。

どうやらこの男、本当にどこまでも自信があるらしい。ここまで自信過剰な人間も、貴重ではないだろうか。

そう思い、ふと視線を総司の後ろにやった時。黒いスーツの男……ハンターの姿が視界に入った。

同時に、相手もこちらを視界に捕らえたらしい。一瞬だけ動きを止めたかと思うと、すぐさまこちらに向かって猛スピードで駆けて来た。

「狩人でも、天の道を阻むことは出来まい」

総司も気付いたらしい。そう言いながら、どこか余裕気な表情でその場を駆けていく。勿論、自分とは別方向に。

別方向に逃げるのは、少しでも犠牲を少なくするためなのか、それとも単なる条件反射か。

しかしハンターが視界に捕らえていたのは……どうやら自分ではなく総司の方だったらしい。しばらく走ったが、追ってきている気配が無い。

呼吸を整えながら、周囲を見回す。中央エリア北口からは少し離れてしまった。配られた時計の指し示す残り時間は三十七分二十秒。ミッシェンクリアには十分に余裕がある、とは少々言い難い状況だ。

何しろこれから、鍵を持っている人間を探し出し、なおかつハンターを封印しなければならぬ。

それも、多少の時間の余裕を見た上で。

総司の無事を祈りつつ、ソウジは再び周囲を見回す。ハンター以外の誰かを見つけ、なおかつその人物が鍵を持っていることを願って。

そんな彼の願いが通じたのだろうか。少し離れた場所に、赤いジヤケットを着た派手な格好の青年が周囲を睨みつけるようにして立っていた。

とりあえず、彼が鍵を持つ人物なのか確かめてみよう。

思い、その人物に近づくソウジ。そして…

「あんたの名前を教えてくれ」

と、ごく普通に問いかけた。そう、普通に問いかけたつもり…だったのだが。

その男は不快そうにソウジを睨みつけると、これまた不快そうにその胸座を掴み…

「俺に質問するな」

と言ったのであった。

現在、ゲーム開始から四十三分経過。

獲得賞金は、五十一万六千円。

参加人数は、十七人。

…ハンターとエネミー開放まで、あと七分…。

こんばんは。

今回もありがちなミッション&特殊ルールにてお送り致しております。

*

新ルール、「エネミー」。その名の通り、敵です。

こいつはハンターとは異なり、捕まっても失格にはなりません、それまでの賞金全没収…という、ちよいと恐ろしい敵です。

そのうちの一人が、パラドキサ…というよりはアビスこと鎌田のおじさん。

もう一体は…あの迷惑な人にしようか、別の人にしようか考え中です。

*

一方のカブト。相変わらず自信満々な総司と、それなりに常識人なソウジ。

……しまった、総司の参加理由が明らかになってない……っ！
後日明らかにします。今回の流れでは、ちよつと不自然になってしましますから。

*

ソウジが最後に出会ってしまった赤ジャケット…「あの人」ですね。この状況下で「俺に質問をするな」は無いわ、流石に。

*

それではまた次回。

連続更新が途切れそうな予感ビシバシの秋月でした。

MISSION・2：ハンター&エネミー解放 終幕

「照井、丁度良いところに！」

赤いジャケットを着込んだ、およそ刑事には見えない刑事…そしてこの街に住まう、もう一人の仮面ライダーである照井竜を見つけると、翔太郎は周囲を見回しながらも彼に向かって駆け寄った。

自分の少し後ろには、ゲーム開始からずっと一緒にいる良太郎が、ヒヒイと息を切らせながらついてきている。

一方で竜の前には、参加者と思しき一人の男性が、胸座を掴まれた状態で困った表情を浮かべていた。

それを見るや、翔太郎は軽くこめかみを押さえた。

おそらく、掴まれている「誰か」は、竜に向かって何か質問をしてしまったのだろう。しかし、質問をされることを極端に嫌う竜のこと、いつもの様に「俺に質問をするな」とでも言って相手を困らせたのだろう。

ある程度そんな彼に慣れている翔太郎ならいざ知らず、初対面の人間には困惑しきりな態度のはずだ。

「……左か。何の用だ？」

「決まってるだろ？ハンターBOX封印する鍵を交換して欲しいんだよ。……こいつと引き換えに、な」

言いながら、翔太郎はどこか悲しそうな顔で自身の持つ「特殊ツール」……スカルメモリを竜に差し出した。

翔太郎にとってスカルメモリは、師が使用していた、思い入れのある品。仮にレプリカであったとしても、それを全くの他人に渡すのは、心痛を伴うのだろう。

…ごめん、おやつさん。けど、俺達が生き延びる確率を少しでも上げたいんだ…

心の中で謝りつつ、翔太郎はその悲しげな目を帽子のつばで隠す。帽子は、目元の優しさと冷たさを隠すための物だ、と彼の師は言っていたが、今回ばかりは僅かな涙を隠すのに役立ってくれている。

…俺に帽子は、まだ早かったかな、おやつさん…

―感傷に浸っている場合じゃない、翔太郎。早く照井竜に、鍵とスカルメモリを交換してもらい、BOXを封印しなければ、ハンターが放出されてしまう―

どうやらようやく良太郎に関する検索を終えたらしい。フィリップが水を差す様な冷静な声でそう告げた。

確かに、残り七分弱。BOXが視界に入る場所にあるとは言え、封印できるのは一体のみ。封印した瞬間、他のハンターが解放され、呆気なく捕まる可能性もあるのだ。そうならないためにも、さつさとハンターを封印した方が良い。

そんな翔太郎の想いを理解したのか、竜は小さく笑いながら、目の前の男から手を離すと懐中から真っ赤な…アクセルのメモリを連想させる色の鍵を取り出した。

「鍵だ。持って行け」

ぼおんと放り投げられたそれを受け取り、軽く掲げるように持ち上げると、翔太郎はサンキュ、とだけ返し…

ハンターBOXに向かい、駆け出して行ったのであった。

全ては、賞金を獲得するために。

そしてその後ろでは…いまだ呼吸を整えている良太郎と、竜に掴

まれていた青年…ソウジがそこに立ち尽くしていた。

「これで一つは封印できたとして、問題は残り二つか…」

「えーっと、三原修二さんと、一条薫さん、ですよね。どんな人なんでしょう？」

「さあ、俺にもわからないな」

自身の呟きに返してきた良太郎を見つめながら、ソウジは苦笑と共に言葉を返す。

相手の顔が分らない以上、ミッションへの参加は難しい。

それに、残り時間は六分を切っている。今から鍵を持っている人間を探すのは至難の業だし、仮に見つかったとしても時間内にハンターを封印できるとも思えない。

もう一つのミッションであるエネミー封印も考えたが、これも少々時間が足りない。目の前にいる青年と共に向かうと言うのも考えたが、今の彼の体力から考えるとエネミーBOXに到着するまでに大分時間を食いそうだ。

それならば……

「今回のミッションはやめておくか。とにかく、逃げるのが先決だ」

それだけ言うと、ソウジは遠目に見えるハンターBOXと、そこへ駆けて行く翔太郎の後姿を眺めていた。

*

「変身！」

真司が止める間もなく、右手を左斜め上に突き出したシンジが真

剣な表情でそう宣言、赤い鎧の戦士…龍騎へと変身していた。

目の前にいるエネミーを、倒すために。

しかし…エネミーを倒す条件は「二人同時に攻撃すること」。シンジだけではBOX内にいるエネミーを倒すことはできない。

だからと言って、真司は…正直、変身する気は無い。と言うか、未だに自分が変身できるという事実を受け入れきれていない。

シンジが、相手にどんな思いを抱いているのかは知らないが、良い感情を持っていないことは分るし、アレがエネミーだと言うのなら、倒すのがベストだと言うのも理解している。しているのだが…何の抵抗も出来ない人を攻撃するということは、非常に躊躇われるのである。

と、思った瞬間。シンジが変身する時に使っていた建物から、白い蜘蛛のような物が飛び出し、真司に向かって襲い掛かった。デイスパイダーと呼ばれる、蜘蛛型のミラーモンスターだ。

「何でこいつが……!？」

驚きの声を上げたのはシンジ。だが次の瞬間、彼はエネミーBOXの中にいる鎌田の方に目を向けた。

…今まで無表情で、眠っているように目を伏せていた相手が、今は目を大きく見開き、楽しそうに笑っている。

「お前の…お前の仕業か!？」

「その通りだ」

ガシャとBOXの格子が鳴るが、鎌田は特に慌てた様子も無く低く笑う。自分からこの檻を壊すことは出来ないが、ミラーモンスターを呼ぶことくらいは出来るらしい。

実のところ、アビスハンマーを呼んだつもりだったのだが、この際何でもいい。

シンジが鎌田を嫌っているように、鎌田もシンジを嫌っている。いや、恨んでいると言っても良い。そんな彼が連れてきた存在だ、今、この場で殺してしまおう。そんな歪んだ思いの結果が、このデイスパイダー…だったのだが。

「伏せろ、青年！」

怒鳴るような声が響き、真司は反射的に伏せる。同時に、デイスパイダーの顔面に、どこからか飛んできた火球が着弾した。

「何！？」

火球が飛んできた方向を向くと、そこにいたのは…紫色の、「鬼」だった。太鼓の撥のような物を構え、その先に付いた赤い石からは煌々と燃え盛る炎が上がっている。

…ひよっとして、あの人もライダー？…

若干異形のように見えなくも無いが、自分を助けてくれたのは間違いないあの「鬼」だろう。ぽかんとした表情を浮かべながら、真司がその「鬼」を見つめていると…

「今のうちに、こっちです！」

「へ？」

グイ、と腕を引かれ、真司は思い出したようにその場から離れる。自分を引っ張ったのは小学生ぐらいの、和服のようなものを纏った少年だと気付いたのは、ある程度デイスパイダーから距離が開いた時だった。

「あ…アンタは…？」

「ん？俺はヒビキ。よろしくな」

シンジの問いかけに、二本指で敬礼するような仕草を取り、「鬼…響鬼こと、ヒビキは軽く挨拶をする。

邪魔をされたことに腹を立てたのか、デイスパイダーは甲高い声で吠えたと、ヒビキに向かって大きく前足を振り上げると、彼目掛けて振り下ろす。だが、ヒビキはそれを軽やかにかわすと、逆に持っている撥で足を叩き折り、相手のバランスを崩した。

「これ、対ツチグモ用の戦い方なんだが…案外と他の怪物にも効くんだなつと」

残った足で殴りつけようとしてくるデイスパイダーに対し、ヒビキは容赦なく撥を叩き込み、その足をもへし折る。

デイスパイダーのような蜘蛛型の異形と戦い慣れているためか、その動きに無駄は無い。足をへし折った直後、彼は高く飛び上がる…と…

「音撃打、爆裂強打の型っ！」

言うが早いか、デイスパイダーの胴をヒビキの撥による連打が打つ。太鼓を叩く時のような、清く澄んだ音が周囲に響き、最後の一打がデイスパイダーの腹部を穿った。

どおん、と言う爆音と共に相手は散り、それを確認するとヒビキはゆっくりと鎌田へと視線を移す。

「お前さん、人間じゃないな？童子って訳でもなさそうだけど」「箱の中にいるってことは…エネミーですね」

ヒビキの言葉を継ぐように、真司の腕を引いていた少年：アスムが、中の鎌田を睨むように見つめながら言った。

エネミーは、ハンターのように失格にはならないが、今までの賞金を没収するという存在。

しかも、今見た感じだと……平然と異形を用いてライダー達を追い詰めるつもりらしい。そう言った意味では、ハンターよりも厄介な存在だろう。何しろ、下手をすると命を落としかねないのだから。

「やっぱり…アンタはここで倒す！」

「そうだな青年。この人が、敵だつてことは分るし」

言うが早いか、ヒビキは腰を低く落とし、己の武器を構え、シンジは腰のカードデッキから一枚のカードを取り出し、腕についている竜の頭の形を模したリーダー：バイザーと呼ばれる物に装填した。

— FINAL VENT —

読み込まれたカードの名が告げられ、デイスパイダーが現れたのと同じ場所から、真紅の龍：無双龍・ドラグレッダーが現れ、シンジの後ろに控える。

「音撃打、一気火勢の型！」

召喚されたドラグレッダーの息吹と、ヒビキの繰り出した烈火の如き一打が重なり合い、シンジの必殺技：ドラゴンライダーキックの威力を更に上げる。

己の「敗北」を悟ったのか、僅かに鎌田は苦笑を浮かべ……

「これで終ると思わないことだ、辰巳君。まだまだミッションはあるのだからね」

そう呟いたように聞こえたのは、真司の気のせいだったのだろうか……

派手な音と共に、鎌田の入っていたエネミーBOXは爆散、これに残るエネミーは一体となった。

ふう、と安心したようにシンジが息を吐き、ヒビキも己の武器である撥をしまった、まさにその時。

ハンター漆黒の悪魔の姿が、彼らの視界に入ってしまった。それも、二人も。

あちらの方もこちらに気付いているらしい。猛スピードでこことの距離を詰めてきている。

「青年、アスム、逃げろ！」

「ヒビキさん！？」

「シンジ！」

「良いから行け！」

俺達も後から追いつくからさと付け足し、シンジは真司に向かって軽く頷いてみせる。

ヒビキも同様に、出会った時と同じ敬礼じみたポーズを取っている。

迷っている暇は無い。ライダーに変身している彼らなら、ひよつとしたら逃げ切れるかも知れない。万に一つの可能性はあるが。

それに……この場には、子供のアスムもいる。彼も仮面ライダーなのだろうが、とにかく一人にするのは危険だ。

一瞬で判断し、真司もまた頷きで返すと、アスムの目を真っ直ぐに見つめ……

「……行くぞ！」

「……はいっ！」

二人の仮面ライダーに促されて、彼らはその場を離れる。

……攻撃の爆音を聞きつけ、こちらに向かってきているハンターから逃れるために……

―残り時間、三十一分八秒。中央エリア南口付近で辰巳シンジ、ヒビキを確保、残り十五名―

*

「な…何とか撒いたか……？」

「た、多分」

ぜいぜいと息を吐きつつ、巧とタクミはその場に思わず座り込んだ。

隠れていた目の前で、紅渡が捕まり…それを知らせるメールの着信音で、ハンターに気付かれてしまい、今ようやく逃げ切ったところなのだ。

「目標金額達成したから、さっさと自首しようと思ったのにな……」

「とんだ邪魔が入っちゃいましたね」

苦笑を浮かべるタクミに、巧は心底疲れきった表情を返す。

自首をしたくても、そのために必要な「乗り物」が見当たらない以上、自首はできない。

はあ、と深い溜息をどちらかが漏らした瞬間、彼らの視界に二人の人影が映った。

……ハンター封印の鍵を持つ者の一人、三原修二と、もう一人は

…やたら無愛想な男だ。

「三原？」

「乾君」

「……隣の男は？」

「一条薫さん。俺と同じ、鍵を持つ人だった」

「俺はもう、五代と交換してしまったが」

そう言つて一条が見せたのは金色の弾丸。

「……交換する？ハンターBOXならそこにあるけど」

言いながら、三原が差し出したのは彼が変身するデルタのフォトンブラッドを連想させる銀色の鍵。

そしてその視線の先には確かにハンターBOXがある。

三つのうち一つは既に封印済みらしいが、まだ二つは何も施されていない。

「五代はさつきハンターに追われていたからな。流石にもう戻つてこれないだろうな」

「残り…二分か」

「でも、ぎりぎりの距離です。封印できますよ、乾さん」

残り二分でハンターが解放される。こうしている間にも時間が過ぎていくことを実感しているのか、タクミは躊躇うことなく三原に向かつて特殊ツール、オーガフォンを差し出した。

「お前…いいのか？自首出来なくなるぜ？それに、もう間に合わないだろ？」

「それでも…やってみます」

につこりと笑いながら、巧の言葉にタクミが答えた瞬間。
どうやら雄介を見失って戻ってきたらしいハンターが、そんな二人を視界に捕らえ、勢い良くこちらに向かって駆けて来た。

「畜生っ、またかよ……!!」
「そ…そんな…っ!」

折角、鍵を手に入れたにも拘らず、自分達の後ろをハンターが追ってきている。

認識すると共に、タクミは急いでベルトを装着、ファイズフォンに変身コードである「555」を入力する。

「おま…っ」
「変身!」

— COMPLETE —
— START UP —

連続で電子音が響いたと思う間もなく、タクミの姿が掻き消える。
超高速移動形態、ファイズアクセルフォーム。

それを使ったのだと認識した瞬間、巧は一目散にその場から離れる。

確かに、アクセルフォームを使えば一時的にハンターの目をごまかせるかもしれない。それに、何とかハンターBOXを封印するのには間に合うだろう。

逃げながらも思い…そして、ふと気付く。
仮にハンターを封印できても、今からでは封印と解放がほぼ同時になるだろう。

もしもそうになったら…今度はアクセルで逃げることなど出来ない。

すぐに捕まるのではないのだろうか、と。

そして……

ゲーム時間、残り三十分を差した瞬間。

……白いスモークと共に、ハンターが解き放たれた。

―残り時間、二十九分五十六秒。中央エリア北口付近で尾上タクミを確保、残り十四名―

そして、ハンターが解き放たれた頃。

もう一つのエネミーBOXもまた、解放された。

誰にも見つからず、今まで中で眠っていたように目を伏せていたその男は、扉が開いたのを合図に目を覚まし…手に持っていたチキンに噛み付くと、一言だけ低く呟く。

「さて…誰から食ってやろうか……？」

解き放たれたエネミーの名は、牙王。

目の前にある全てを喰らい、無に帰すことを望む者。そして今回は…逃げ惑う者達が溜め込んだ「賞金」を喰らうことに専念する、厄介な存在…

ミッションその二：ハンター&エネミー解放結果発表

左翔太郎、尾上タクミの活躍により、二体のハンターを封印。ヒビキ、辰巳シンジの活躍によりエネミーを一体撃破。しかしハンター、エネミー共に一体ずつ解放され、ハンターは五体、エネミーは一体となった。

現在、ゲーム開始から五十一分経過。
獲得賞金は、六十一万二千円。
参加人数は、十四人。
ゲームは更に、過酷さを増す……

MISSION・2：ハンター&エネミー解放 終幕（後書き）

こんばんは。

長らくお待たせいたしました、MISSION・2結果編。

色々な人が出てきたので、今回はライダーの名前はサブタイトルにはつけておりません。

*

さて。

ついに変身が実現したものの、変身したはしからとっ捕まっております。

シンジ、ヒビキさん、そしてタクミ。

ハンターは五人ですが、エネミーの牙王もいるので油断大敵です。

*

次回は牢獄deトークを予定しておりますが…次回の更新がいつになるやら全く見当が付きません。

気長に待つて頂けると幸いです。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5754k/>

平成ライダー×逃走中

2010年10月10日11時41分発行